

知らないと怖い経済の基礎

会社(資本家)が儲かる仕組み

剰余価値」という言葉をご存知でしょうか。これは、ひとことと言くと、私たち労働者が労働することによって、賃金分を超えて生み出す価値のことです。この剰余価値が会社の「儲け」として利益に計上されるため、**言ってしまうえば、私たち労働者が会社を養っているという見方も成り立つわけです。** そんなことはない。会社がお金を出しているのだから、労働者を養っているのは会社の方だ。」といった反論を予想して、簡単に説明しておきます。まず最初に、会社が労働者に「労働力」の対価として500万円を支払い、機械や建物等の設備に500万円、減価償却分を投入します。そして、労働者は労働によって1500万円の価値のある製品を生み出します。**この最初の一回の生産だけを見ると、あなたも会社が労働者を養っているかのように見えますが、生産は繰り返し行われるもの。** この最初の1500万円のうち、500万円は労働者の賃金分、もう500万円は設備投資分、のこり500万円は会社の取り分となります。ここで見落としてはいけないのが、2回目以降の生産において、労働者は、自らが労働によって生み出した価値の一部である500万円を賃金として得るため、以後、会社の「負担」は常にゼロであるということです。実際に、2回目、3回目と図に書いてみれば一目瞭然です。

「努力」が報われない理由

わが社をはじめ、多くの会社では「成果主義」が取り入れられています。要は「努力した者が報われる。給料は自分で上げていくもの」ということなのですが、当然、これはおかしな話です。そもそも、**私たちはすでに、賃金以上の価値を生み出しているわけだから、割に合った賃金を支払いなさい」と要求するのが本筋であり、時間外も働きますから給料上げて下さい」とのアピールは、身売りの奴隷的発想に他ならず、出発点」から間違っているわけです。** 中には、「これが資本だ。俺たちには変えられないルールなのだから、それに従うしかないだろ。」と達観している方もおられますが、実際に、その「ルール」の中で搾取されないためにはどうすれば良いかといった視点で、何らかの「思考」や「行動」に結びつかなければ、それは「資本」を正しく理解しているとは言えず、結果、何か不都合が起きれば、それらを全て他人や環境のせいにして現実逃避するだけの残念な生き方しか出来ません。

賃金とは、労働力(生産できる能力)への対価なのですが、賃金が「後払い」であることも、それが「働いた分の対価」と勘違いさせる一つの要因です。



※参考文献
経済学入門
小島恒久 著
労大新書

第 160 号

2022年 3月1日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

JR 092-2075

NTT 092-483-1515



若い力